

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：27101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25511010

研究課題名(和文) 米国における日本の竹文化の受容と展開に関する日米文化交流史研究

研究課題名(英文) Historical study of cultural exchange between Japan and the US through the reception and application of Japanese bamboo culture

研究代表者

岩松 文代 (Iwamatsu, Fumiyo)

北九州市立大学・文学部・教授

研究者番号：50382403

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：日本文化の新たなグローバル化が進展するなか、本研究では、日本の竹文化が歴史的に持ってきた国際性に注目し、アメリカにおける日本の竹文化の受容と展開を明らかにした。調査は、日本の開国以降、アメリカでの日本の竹美術の愛好と蒐集、日本の竹苗の移植・栽培と利用、日本の竹製品の輸入と消費の経緯に焦点をおき、日本とアメリカでの現地調査、および多分野にわたる史料収集を行い、竹文化をめぐる日米の文化交流史を考察した。

研究成果の概要(英文)：Accompanying the recent globalization of Japanese culture, this study examines the history of cultural exchange between Japan and the US through the reception and application of Japanese bamboo culture in the US. The study focuses on the following themes: the cherishing and collecting of Japanese bamboo art; the transplantation, cultivation and use of Japanese bamboo seedlings; and the import and consumption of bamboo products in the US after the opening up of the country to foreign trade with Japan. The study used field surveys in the US and Japan and examined historical materials from various sources.

研究分野：文化学

キーワード：竹 アメリカ 日米関係 日本美術 工芸 貿易 栽培 文化交流史

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の着想は、竹文化の研究に取り組むなかで、日本の竹文化は歴史的に国際性を持ってきたことを見出すようになり、日本の竹文化を客観的にとらえることに新たな理解の可能性はあるはずだと考えたことに端を発している。その国際性についても、日本を含む竹資源や竹文化の豊富なアジア方面との関係と、竹がほとんど自生しない欧米との関係では、その性格が異なると考えられる。

そこで注目したのは、東洋と西洋の文化交流や文化比較である。実際、すでに竹の道具を用いた数々の日本の伝統文化はアメリカで流行し、日本の竹工芸品がアメリカに流出していたことも着想につながった。日本の竹文化は、アメリカにどのように移入し、意味を持ってきたのか。そして、それによって日本はどのような影響を受け、対応してきたのか。竹文化は、量的には決して大きな対象とはいえないが、多様な特性を持ち、様々に考察できる対象であると見込まれるため、日米の文化研究に有意義であると考えた。

さらに、近年では日本文化の新たなグローバル化が進展するなか、日本文化の流入や発展のプロセスを探ることが求められると構想した。

## 2. 研究の目的

本研究は、長期的に、広範囲に渡って米国で展開してきている日本の植物文化において重要な竹を対象として、日本の竹美術や、生物としての日本の竹苗や日本の竹製品の移入と、それらへの米国の対応と応用に関する資料調査や現地調査を通して、日米交流の歴史的、物質的、精神的な背景をふまえながら、米国における日本の竹文化の受容と展開を日米文化交流史的に考察することを目的とした。

そして、実体としては衰退しつつある日本の竹文化の価値を、外部評価によって高めることも期待し、日本の文化を象徴する竹が、国際的にどのような役割を發揮したのかを明確にすることも目的とした。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査内容

本研究では、米国での日本の竹文化の受容と展開を包括的に把握し、日本の開国以降の史的全体像の解明を目指した。ただ、これまで文化的影響を及ぼしてきた日本の竹文化は非常に多岐にわたるため、ここではその重要な軸を形成していると考えられる次の着眼点にしばって調査した。まず、アメリカでの日本の竹美術の流入と展開、次に竹苗の流入と展開、そして竹製品の流入と展開である。

### (2) 現地調査および資料収集

現地調査先は、関係者の取材や各地での観察や資料収集のため、国内では東京を主とした関東圏、京都を中心とした近畿圏、大分を中心とした九州圏等で、複数回の現地調査を行った。アメリカでは、二回の現地訪問を行った。対象地域は、サンフランシスコ、ロサンゼルス、デンバー、ニューメキシコとした(2013年、2014年)。また、アメリカ在住の研究協力者によっても美術館、学芸員、コレクター、骨董品店舗等への取材、および作品や展覧会の考察が行なわれた(2013年)。

そして、研究期間を通して、アメリカの竹工芸関係文献、栽培・園芸関係文献、農政関係統計・データベース、日本の貿易史・行政史料等、多方面から資料収集を行った。

## 4. 研究成果

### (1) 日本の竹美術の愛好と蒐集

竹美術については、「竹美術の流入史の文献資料調査」、「米国美術館所蔵の竹美術品調査」を目指して、日本からの竹美術の発信について、博覧会や展覧会の出品や輸出工芸品に関する史料調査を行った。そして、日本国内の骨董品店舗の専門家や美術館の学芸員、そして竹工芸品を製作し、作品が米国で蒐集されている作家への聞き取り調査を行った。さらに、「竹美術コレクションの実態調査」を目的に、コレクターや蒐集を担当してきた美術館のキュレーターに対する聞き取り調査を行った。

アメリカでは、日本の竹工芸は明治期においてもすでに愛好されていたが、とくに竹工芸に格別の関心を寄せて蒐集された、戦後のラッツ・コレクションや、それ以降の時代に大きく発展したコッツェン・コレクション、またスナイダー・コレクションやクラーク・センターで作られたコレクションに関する聞き取り調査や、豊富な竹工芸のコレクションを有する個人の方々への訪問などを行った。そして日本の竹工芸品を専門にあつかうアート・ギャラリーの活動が果たしてきた役割について知見を得た。

美術館の収蔵作品は、こうした蒐集家の知識と感性に裏付けられたコレクションと密接に関わっている。そして、サンフランシスコ・アジア美術館、デンバー美術館、ボストン美術館をはじめとする美術館や文化交流機関で開催された竹工芸の展覧会の実態と経緯の調査も行った。

熱心なコレクターの例として、竹という植物への強い関心からはじまったラッツ・コレクションは、現在では、デンバー美術館にその多くが収蔵されている。ラッツ一家が蒐集した膨大な竹工芸コレクションは、日米交流を背景とした「竹」の発見と、そのアメリカでの販売とさらなる日本での蒐集といった、竹製品・竹工芸とともにあった家族の旅と異文化とともに歩んだ暮らしぶりとともに形成されたといえる。

アメリカでは、日本の伝統的な竹工芸品から新たに創造されるアートにいたるまで、新旧の作品が、様々なタイプのコレクターによって収集され続けていることが確認できた。とくに、竹籠という概念ではなく、コンテンポラリー・アートとしての価値が、アメリカの美術愛好の場面において高まっている。これは、アメリカにおいてこそ生まれた価値観である。アメリカで竹工芸を観る眼が醸成され、これが日本の竹工芸に影響を与えている。日米交流が現代の日本の竹工芸を支えている一側面が明らかになった。

## (2) 日本の竹苗の移植・栽培と利用

植物体としての竹のアメリカへの移入とその栽培展開については、「竹栽培史の資料調査」、「竹林経営者、竹園芸家の実態整理」、「竹栽培と生産の実態調査」を目指して、園芸店や苗木市場、美術館や博物館の日本庭園の竹植栽を訪問し、竹を栽培してきた農場や試験場の栽培経緯や植栽実態をふまえて、考察を行った。また本研究のために、アメリカ竹協会に対して現地での情報収集を進め、現地調査への協力を得た。

竹は、北米にはほとんど自生していない。開国以後の日本を訪問したアメリカ人は、身近な部分にふんだんに竹を用いていた日本人の暮らしに驚き、その魅力を見つけた。

日本の竹は、アメリカ農務省の大きな期待を背景に、政策的に導入された。竹は成長が早く、用途が広く、そして筍が食用にもなる点が注目された。竹は、経済的に非常に有益とみられ、多種のタケ類やササ類が移入された。

日本の竹の導入以後、日本とは異なる気候条件下で、実験竹林を設けて栽培された。降水量、日照、温度、湿度等の気候条件が整い、タケ類が生育できるのは、主にアメリカ東南部、南部、太平洋側の地域である。栽培適地が限られていることから、地域ごとに気候に合わせた竹種の選択と栽培方法が工夫されていることに特徴がある。アメリカでは、日本と同じようには栽培できず、竹の導入後に、現代にいたって広大に自然に竹林が広がっているわけではない。

タケ類は、地下茎が延伸する温帯性タケ類と株立状の熱帯性タケ類に分けられ、日本での有用種を含むマダケ属は温帯性タケ類である。マダケ(*Phyllostachys bambusoides*)は、ジャパニーズ・ティンバー・バンブー、モウソウチク(*Phyllostachys edulis* (*Phyllostachys pubescens*))は、モウソウとよばれるように、竹名の通称にも日本の影響がみてとれる。かつて中国から日本へ移入した竹種であっても、日本的な竹文化として形成され、ときには意識されている文化の流れもうかがえる。

日本の竹の園芸栽培にあたっては、これまでの日本の生態研究や栽培技術が参考とされ、日本庭園の作庭ではもちろん、アメリカ

の建築においては日本の竹垣根も応用されている。

日本由来の竹苗が、導入から百年を経てもなお歴史的な竹林とされて保全管理され、近年とくにまた新しい愛好家によって、日本から来た竹として再発見されている竹林がある。日本の竹は、日本的なものとして物語となり、尊重されていることがわかった。

さらに、アメリカの気候条件や住宅設計に合った、アメリカ文化にもとづいた竹利用や、新たな竹ビジネスの開始もみられた。

## (3) 日本の竹製品の輸入と消費

竹製品については、「竹製品貿易史の資料整理」、「竹製品消費の資料調査」、「日本の輸出実績の聞き取り調査」を目的として、行政史料の検討や、竹製品や竹工芸を通じてアメリカと日本とを結びつけてきた貿易商社やメーカーへの聞き取り調査を行った。そして、竹材・竹製品の明治期以降の商業的な米国移出の歴史と日米文化交流の関係、輸出工芸品や輸出製品の日本的な魅力等についての考察を行った。

かつて日本からの輸出が盛んであった頃、竹製品は、日本の豊富な竹資源による生産力や加工の技術力に支えられ、また美的感性などの資質を備えてきたことに加えて、日本の竹に対する米国からの好奇心や憧れが強く寄せられていたことがみとめられた。その変遷には、以下の点が指摘できる。

### 輸出重要品としての竹製品

竹は、欧米には基本的に生育していない東洋的な植物であり、また竹製品も珍しかった。万国博覧会には、竹材や竹工芸品が出品され、珍しく、美しい竹による品物が展覧されることとなり、竹工芸品は好評を博して、技巧をこらした竹製品もまた関心を集めた。日本では、竹材・竹製品は輸出重要品とされていた。

### 洗練された日本の竹文化を発信

日本文化に由来する品目を輸出して、アメリカで日本趣味を形成し、文化的な影響をもたらした。日本の竹製品は、アジア諸国の中なかでも早い時期にアメリカに輸出された。

### 日本の竹材・竹製品の大きな輸出規模

日本は開国以降、竹材・竹製品の輸出に取り組み、高まっていく大きな需要にも応え、販路を拡大してきた。

### 時代に応じた新商品の創出

数年間ほどの一時的な流行であっても、アメリカの求める品目に応じて生産、輸出してきた。時代ごとの需要に応じて、日本の竹製品の輸出は盛衰しながら、対応してきた。

### 日本の竹材、竹製品の高い品質や技術

日本からの輸出は、他国との競合や模倣品の発生により減少し、また現代では新たなアメリカのニーズに対応できないこと等により減少している。しかし、貿易は小規模となっても、日本的な竹製品や日本の品質は認められている。かつて求められた日本的な要素は記憶されていると考えられる。

(4)本研究のまとめと意義

本研究では、日本の幅広い竹文化として、竹美術、竹製品、竹栽培の実態を明らかにし、多面的からの理解へとつなげることができた。竹は広い利活用が可能であるため、美術、生態、経済史に関わる点から考察できた。そして、これらの相互のつながりもまた重要であり、それが米国における日本の竹文化の存在形態である。

日本でも近現代では竹文化が大きく変遷してきたが、それに伴い日米交流の内容も変化している。本研究では、その歴史を考察することができた。

現在では、竹文化は日本でも実体としては規模が小さくなり、とくにアメリカにおいては小さな要素にすぎないともいえるであろう。しかし、竹は日本人の生活との関連が深く、ささいな部分であっても、日本文化の物質的、精神的な多くの部分がアメリカに伝達されることになるのである。また、比較文化の研究においても、竹を対象とすることは、日本文化研究の新しい有効な視点であると思われる。

本研究は、アメリカの竹文化全体を観察しながら進められた。常に日本の竹文化と比較しながら物事をとらえることによって、異文化からのアメリカ発見につなげることができ、アメリカの竹文化研究にも貢献していただけることを期待する。

最後に、日本文化の形成において重要な竹文化は、その小さな規模を超えた文化的な強さがある一方で、実体としては衰退基調にある。本研究の客観的な竹文化研究が、日本の竹文化の振興や価値理解の向上に役立つことも期待している。

今後は、本研究の着眼点を基礎として、さらに詳細な物事や出来事もとりあげ、日米の竹文化交流の研究を深めることが課題と考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

岩松 文代、「竹」の発見と伝達 - ラッソー家とアメリカに渡った日本の竹美術コレクション -、旅の文化研究所研究報告、査読有、No.25、2015、pp.111 - 117  
長倉 知子、ボストン美術館スナイダー・コレクション「Fired Earth Woven Bamboo」展レポート、竹、査読無、第124号、2014、pp.11 - 15

[学会発表](計1件)

岩松 文代、竹材・竹製品の欧米輸出の振興と展開、社会経済史学会 第84回全国大会、2015年5月31日、早稲田大学(東京都)

6. 研究組織

(1)研究代表者

岩松 文代 (Fumiyo, Iwamatsu)  
北九州市立大学・文学部・教授  
研究者番号：50382403

(4)研究協力者

白幡 洋三郎 (Yozaburo, Shirahata)  
長倉 知子 (Tomoko, Nagakura)